

第二節 ドラムランリッグ伯爵とクインズベリー公爵夫妻

- 一、クインズベリー公爵夫妻とその子息
- 二、ドラムランリッグ伯爵とリスボン大地震
- 三、大地震以後のクインズベリー公爵夫妻

承前

論文第五 イギリスの貴族・貴紳とリスボン大地震

第一節 牧師リチャード・ゴダールと

ゴダールⅡブランフィルⅡジャクソン商会

第二節 ドラムランリッグ伯爵とリスボン大地震

一、クインズベリー公爵夫妻とその子息

一七五五年の晩夏にドラムランリッグ伯爵チャールズ・ダグラス（子）はリスボンへ結核の療養に来た。チャールズの両親、クインズベリー公爵チャールズ・ダグラス（父）と公爵夫人カトリーヌ・ダグラスは、十四世紀スコットランド独立の志士ジェイムズ・ダグラスの家系を継ぎ、著名な文学者や芸術家の信義あるパトロンとして知られていた。とくにカトリーヌは端麗な容姿と闊達な挙措によって異色の学芸サロンを培い、そこには作曲家ヘンデル、詩人のプライアーとポープ、建築家ウィリアム・ケント、画家チャールズ・ジェルヴァス、文学者のスウィフトとジョン・ゲイなどが集った。音楽劇『乞食オペラ』によって大成功を収めたゲイは、持前の反骨精神のため次作『ポリイ』の上演を禁止され、ジョージ二世からも冷遇を受ける。このような文学者を果敢にも擁護したため、カトリーヌはイギリス宮廷から放逐され、クインズベリー公爵も要職を辞する。

カトリーヌ（愛称キティ）はつとに結婚前十七歳のとき、母親ジェーン・ハイデ伯爵夫人の学芸サロンで、駐フランス大使の経歴をもつプライアに注目され、有名な詩人女ファエトン、初めて公衆の前に現れるキティ・ハイデ嬢で歌われる。こうした環境に育ちながら彼女は、上流社会の豪奢や虚飾を嫌って、宝石類を滅多に着けず、王宮へもときに普段着で現れたと言う。失意のゲイは一七三〇年からクインズベリー公爵の城館に身を寄せ、一七三二年に歿すると邸内に碑石が立てられた。彼の静穏な晩年と公爵の一家についてヘンリー・アーヴィングによる評伝はつぎのように伝える。

ソールズベリーの平原でしばしばゲイは、乗馬やウズラ撃ちに出かけた。ときには公爵夫人の縫いものを手伝いかけたり、母牛の乳搾りや絵画の制作

Charles Douglas, 3rd Duke of Queensberry and Lady Cathrine Hyde in on line

The Douglas Archive. http://douglashistory.co.uk/history/image_folder/Template/mashead.jpg

に手を染める彼女を面白がった。ふたりの子どもを完全に自分の召使にし、彼らと遊ぶのにゲイは多くの時間を費やした。

ゲイが世を去って十二年後、アン女王のの姪にあたるカトリーヌは、宮廷への復帰を許された。しかし、一族のドラムランリッグ伯爵家を継いだ長男ヘンリーは、結婚後まもなく不慮の死を遂げた。死因は拳銃による事故または自殺と言われる。この一族では数年不幸が相継ぎ、ヘンリーの叔父もパリにおいて狩猟の際に事故死した。

二、ドラムランリッグ伯爵とリスボン大地震

夭折した兄に代って次男ダグラス・チャールズ（子）が、ドラムランリッグ伯爵家を相続し、一七五五年の秋リスボンを訪れた。結核を病む彼は上院議員の地位を辞して、温暖な地へ療養に来たのである。万聖節の朝従僕を伴って彼は高台のカルモ修道院の近くへ赴いた。英国商館専属の医家スクラフトンの診察をそこで受けるためである。エドワード・ペイズ著『神の怒り―一七五五年リスボン大地震』には、貿易商チエイズや牧師ゴダールの記録とともに同伯爵の被災体験が叙述される。

バイロ・アルト地区ではドラムランリッグ伯爵チャールズ・ダグラスが医
院で椅子に座り、両親のクインズベリー公爵に手紙を書いていた。そのとき
彼は部屋の激しい震動に驚き、建物全体が揺れ始めるのを感じた。

地震の直後ドラムランリッグ伯爵が父親、クインズベリー公爵に宛てた書簡も
貴重な記録であるが、いまだ印行されていない。ペイズの書誌一覧によれば、グ
ルセスタシエア古文書館には一七五五年十一月の六日付、八日付、十九日付書簡
の三通が保存される。筆者が入手できたのは大英図書館に蔵される八日付お

Willia Henry Irving, *John Gay, Favorite of the Wit*, New York, 1962. pp.280.

Edward Paice, *Wrath of God, the Great Lisbon Earthquake of 1755*, London, 2008.
pp.57-58.

ibid., pp., 58, 67-68.

ibid., p.268

よび十九日付手稿の複写であるが、以下これら全文の試訳を別立として提示した。右記の引用では地震発生の際伯爵は医院の待合室にいたとされるが、この要約は六日付書簡に依拠すると思われる。やや長文にわたる第二信を彼はつぎのように綴り始める。

ドラムランリッヒ十一月八日付書簡（その一）

テージエ河パケット船上にて、

一七五五年十一月八日

敬愛する父上へ

奇蹟的な脱出からまもなく性急に、かつやや取り乱して綴った最初の書簡を、すでに受け取られたと念じています。しかし、私たい一同が大事に到らず、みな無事であるのをお伝えしたほかは、突発した事態の経緯について僅かに述べただけでした。災厄の委細を知るべく父上が当然深く憂慮され、切に望まれると拝察し、襲いかかった出来事をできるだけ正しく報告することに着手します。ただし、それを完了する十分な時間が得られるまで、私はこの手紙を留置させましょう。自分の物語を始める前に確言したいのは、遭遇した苦難に打ちのめされたのではないこと、またいまは雨風や寒気を凌ぐ避難所にあつて、陸地で人々を脅かす苦難、たとえば悪党の跳梁や暴力沙汰から安全に護られていることです。暴力と書きましたが、食糧の欠乏という窮状のため、だれがどんな行動に走るか判りません。その朝十時頃私は座つて、父上に手紙を書いていたのですが、部屋の激しい揺れに愕然としました。さして強まることなく、その震動は一分あまり続き、そのまま私は部屋にいます。しかし、家屋全体が端から端へ揺れるのに驚き、そこから飛び出して、隣室のアレックスと顔を合わせました。ふたりはたがいに腕を組んで支え合い、よろめきながら階段のところまで来ました。そこには地震に耐える石造の拱門があつて、建物の他の個所が崩れても、安全と考えたからです。階段に身を寄せる間に、私がいた部屋が凄まじい様相で倒壊し、戦慄した私たちは外へ駆け出し、家屋の崩れ落ちぬ戸外を見つけようと急ぎました。

しかし、外へ踏み出すや否や、近隣の建物がすべて瓦礫の山と化し、本来の街路を見分けるのが外国人には困難と判りました。とはいえ、鬼気迫る荒墟へ踏み込み、道を掘り分ける郷紳と、私たちは神慮により巡り合ったのです。そして、救うすべもない哀れな罹災者が瓦礫の下から悲鳴と悲嘆を発するのを背にして、ついに私たちは町の大きな広場に辿り着き、建物の落石を

免れるに至りました。そこに十二時頃まで留まる間に、最初の揺れほど強くないものの、さらに二度震動を感じます。その頃広場の一隅に火の手が挙りました。人波が大きくなり、息詰まるような煙が昇るので、荒墟を越えて田園へ逃れようと決意します。それこそ非常な難事であって、もう倒れてしまおうと思ったのですが、ダグラス氏やアレックスに支えられ、ついに安全なところへ来ました。

ドラムランリッグ伯爵が居合わせた医院は、英国商館専属の内科医リチャード・スクラフトンの自邸であった。従僕とともに彼が逃れる背後で、その邸宅は倒壊した。貿易商チエイズのため往診を依頼すべく、ドイツ人ヘイクの従僕が医院に赴き、スクラフトン自身の安否不明を知るはその数時間後である。幸いにもこの医官は近郊ベルンへ避難し、多くの被災者にそこで治療を施した。

医院を脱出したドラムランリッグ伯爵らは、広大なロシオ広場へと向かい、さらに高台のイギリス大使館、カステルス邸を目指す。この経路についても十一月四日付書簡がより詳細と思われ、これを忠実に祖述し、他者の証言をも加味したペースの所論を併せて引用する。

ゴダール・リチャードと同じように、ドラムランリッグと従僕たちもこの都市では完全によそ者であり、まったく不案内であった。しかし、逃げねばならぬ。スクラフトン博士の医院の残骸を前にして遣る瀬なく立ち、なんらかの救援を待ったが、応急の措置はなにもみられない。倒壊した屋根に匍い登りかけたとき、イギリス人の時計師が現われた。ドラムランリッグの名前と称号を彼に告げると、ロシオ広場まで迷路を辿って案内すると約束し、こうなれば一蓮托生ですと断言した。こうして瓦礫の下に生き埋めになった人々の悲鳴と哀願に終始追われつつ、彼らは世にも怖ろしい荒墟のなかで道を探し、普通なら十分の散歩で行ける距離に一時間も費やしてよたよたと進む。しかし、壮大なロシオ広場へついに到着し、その空地がせめて石造建築の倒壊からは護ってくれるように思われた。

ドラムランリッグがロシオ広場で目撃した光景は、いま見てきた惨状と比較

Earl Drumlanrig of Charles Douglas, Letter to Duke of Queensbury, dated 8 November

1755. British Library, Egerton MS 3482, Leeds Papers. Vol. CLIX, ff. 140. pp.1-3.

参照 本稿論文第三 第一節貿易商チエイスの震災記録、八、二七頁。

べても衝撃的なものであった。広場には幾千もの人々が屯し、東、西、南へと通じる道路から幾千もの人々が入り込む。こうした光景を自宅から眺望して、毛織物商トマス・ジャコンブは書いている。「老いも若きも、男も女もあるいは親や子を捜し、あるいは親戚や友人を捜す。彼らの多くは病人のように蒼ざめ、建物の倒壊のため肢体の切断や負傷を蒙っている。すでに息絶えた者もあり、大半の女性が半裸なのである。」また、ほかの貿易商によれば、「極度の錯乱と苦悶から発する号泣がかって耳にしない凄惨な轟音に聞こえた。多くの者がみずから胸や顔を殴り、怪物のような頭部、幽鬼のような顔面に化したのである。」

それは宗教的な白熱または狂熱であって、よそ者がかつて見たことのないものである。ドラムランリッグは十字架に接吻するよう強制され、これを見たひとりの貿易商から、体力が戻ればすぐ狂気の沙汰から逃れるよう助言された。伯爵をはじめいかなるプロテスタントのよそ者も、恐怖を抱く充分の理由を持っていた。異端者とは容易に糾弾できる標的であった。リスボンでは一五三一年の地震のあと、新教徒に改宗したユダヤ人が民衆に襲撃され、近々一七二三年の疫病蔓延に際しては聖職者が貿易商を非難し、汝らの貪欲が神の怒りを招くと警告した。

ロシオ広場一帯では広大なサン・ドミngo教会から炎が昇り、不寛容の象徴ともいふべき異端審問所もまもなく炎上した。広場からドラムランリッグが分け入ったサント・アンタオ門街は、十四世紀に旧市街の境界としてフェルナンドの市壁と市門が築かれた道路である。ここでもフランス系のサン・ルイズ教会や堅牢な第一監獄が破壊され、国際的な学者の旧居であるルリカル侯爵邸も燃え始めた。大地震に伴う大火について『世界地震通史』にはサン・ジョルジエ城の福祉施設など四つの火元が誌されているが、ドラムランリッグはうちふたつ、サン・ドミngo教会とルリカル侯爵邸の出火を目撃したわけである。アヌンシア広場の一角を占めるこの豪邸は、サント・アンタオ門街の中程であるが、サンタ・マルタ街のイギリス大使館へは険しい坂道を登り、なお相当に遠い。ペイズの記述をさらに続ける。

ドラムランリッグはロシオ広場からも離れる心構えをする。しばし休める

ところへ案内されたので、親身な時計師に彼は過分の謝礼を与えた。それまでの難行でまだ身体は弱っていたが、狂躁のなかにもはや留まることは欲しくない。ジョン・モリソン、秘書ダグラス、經理アレクサンダー、他の従僕たちとともに彼は、サンタ・マルタ街のアブラハム・カステルス邸（イギリス大使館）を直指して、サント・アンタオ門街を歩み始めた。「中略」

首都から懸命に逃れる群衆に揉まれながら、ドラムランリッグ卿とその一行はロシオ広場から北方向のカステルス邸へ徐々に進んだ。ルリカル侯爵邸へ通りかかると、突然その建物が炎上し、障害を越えて道を辿るのがきわめて困難となった。ダグラスやアレクサンダーなどの助けがなければ、そこで亡じたであろうドラムランリッグは信じる。とうとう彼らは瓦礫を掻き分け、オランダ大使ボスク・ド・ラ・カルメツテ殿と出会った。彼は家族および七、八人の従僕と一緒に、みな疲労困憊し、カステルスに身を寄せるつもりなのである。一マイル足らずの道程であるが、ロシオ広場を離れてから三時間経過した。そして、ついに彼らは大使館が構えているのを目にした。年配の大使は地震のとき二階の窓から跳び降りたが、具合を悪くした様子はなく、数を増す庭園の避難者に飲みものを配っていた。

カストレスの公邸、イギリス大使館はフランシスコ会サンタ・マルタ尼僧院の近くに位置した。十六世紀に創建されたこの尼僧院も相当の被害を受け、修道女たちは裏庭のテント小屋に避難して修復を待った。イギリス大使館では内部が破壊され、引き続き危険であったが、カストレスは脱出して無事であった。ここでは多数の被災者を受け入れ、多くは庭園で野宿する。以後カストレスの避難については十一月八日付書簡がより詳細である。

ドラムランリッヒ十一月八日付書簡（その二）

カルメツト殿とそのご家族はみな憔悴しており、彼らを残して私たちはカステル氏の公邸へ向いました。裏手には広い庭園があり、そこなら救助と保護を得られると期待したからです。平常は一マイル足らずの道程ですが、障

Paice, *op. cit.*, pp. 94, 108-109.

Francisco. Ereira de Sousa, *Efeitos do terremoto de 1755 nas construcções de Lisbon*, Lisboa, 1909. p58-59.

壁や瓦礫を避けてようやく三時頃に辿り着きました。さして激烈な震動ではなく、多少破損したものの、公邸は持ち堪えていました。庭園で私たちは飲みものと居場所を供されたのです。そこに留まって夜となり、閉め切った邸宅の一隅で敢えて眠るか、なんの覆いもなく、庭園で横臥するか、一同は応答を迫られました。私はと言えば、昼間は陽射しのため熱気を感じ、夜の十時頃には冷えてきたので、邸内で休むことに決めました。そこでも昼間ほど強烈ではないものの、夜間に幾度か余震を感じ、慌てて避難したのです。やはり邸内は避け、テントの下か、船の上で眠れるよう、苦慮しました。日曜の朝私たちは野宿の体制を整え、帆布と長竿でわが身を雨風から護るようになりました。しかし、夜間の非常な寒さと大勢の人々の叫喚に慄然として、火曜日の朝河畔に降りて、パケット船を呼び寄せました。求めに応じてその船は私たちを乗せ、そのまま港に停泊したのです。いつまでそうしているか判りません。なぜなら、他のパケット船が到着するか、地中海から軍艦が戻るまで、出港が禁じられています。

ダグラス船長が地中海へ出航すれば、一緒に行くのが最善の方策で、日々彼に希望を寄せています。イタリアへ迂回する便宜を得られないと、イギリスへ直行せざるをえないのですが、この季節における気候の急変をできれば避けたいと思います。いずれにしても、いま身を置くパケット船で帰国するか、他の経路を選び、父上への便りをこの船に托すことになるでしょう。

大使館でドラムランリッグ伯爵は、角材で支えた邸内で一夜泊まり、竿と帆布で造られた仮設小屋で昼は過した。しかし、大火に伴う灼熱と夜間の冷込みが大気を急変させ、持病である結核性の痰咳を悪化させる。なお余震が懸念される邸内から庭園に設けられたテントへ移った彼は、さらに停泊中のパケット船に入り込み、寒気と風雨を避け、寝場所を確保することとなった。

しかし、伯爵の容態は日増しに深刻となり、帰国船での疲労困憊は命に係わりと周囲の人たちは憂慮する。イギリスの冬の寒さも避けるべきだ、とベレンから出向いた医家スクラフトンも助言した。しかし、この時期に綴られた書簡みには、やや落着きを取り戻したかのように、一般的な被災状況の報告も含まれる。

Drumlanrig, op.cit., pp.3-4.

Paice, op.cit., pp. 125.

ドラムランリッヒ十一月八日付書簡(その三)

最初の地震は五分あまり続き、震災の大半は劈頭生じたものです。それ
に続く火災がいまも燃えさかり、全市を余すところなく壊滅しました。大祭
の日に当たるので、教会は信者で満ち溢れ、すべて最初の瞬間に倒壊しまし
た。どれほど多数の人々が犠牲となったか、ご推察ください。王宮も完全に
破壊されました。国王ご一家は首都から一里のところへ避難されました。こ
の終日内閣は懸命の努力を続けて、生活物資の供給のため若干の規制を敷き、
混乱のさなかに続発した怖るべき悪事の横行を断ち切りました。われらの商
人数名は完全に破滅しました。高潮から金庫を護った人もいますが、ブラジ
ル人宛イギリス商品をポルトガル人に委ねたため、艦隊の帰還までに支払を
受け取れず、相当の負債を抱えており、先方が完全に破滅したため、取り戻
せない状況です。十二名を超える英国商館の人たちは幸いにも無事でしたが、
みな住居は破壊されました。これまで乾いた天候が続いたものの、雨になつ
たら避難民がどうすべきか判りません。地震は海上の船でも感知され、スペ
インでも発生したが、当地ほど強烈でなかったようです。今次の災厄につい
てきわめて不確かな報告を差し上げたかと懸念します。

大勢の人々が過度に申し立てるので、不確かな事柄を伝えたとしても、な
にとぞお赦してください。一同が無事であることを神に感謝します。やや混ん
でいるが、適切な片隅でベッドに横臥し、衣類を脱ぐことすら、小さからぬ
慰めであると申し上げます。多くの人はまだこうした楽しみに浸れません。
衣類や敷布の大半は損われたのに、当面充分なだけそれらを掻き集め、事態
がやや鎮静したいま私たちは、やや静穏である消えましたが、欲しい物をな
んでも入手できるのです。機会を逃さず、私たちの知恵をお伝えしたいと思
います。父上を敬愛する忠実な希望であることを確信して頂くため、これか
らも時間が許すかぎりお便りしたいと存じます。

父上のもっとも忠実で従順な息子拝。

つぎのクインズベリー公爵宛書簡は十一日後、十一月十九日の日付であって、
これも闊達な活字体で書かれているが、用箋一枚強とやや短い。自身の現状につ
いて言葉が少ないのは、両親の心配を増したくないためでもあるう。パケット船

から大きな商船に所在を移し、毎日陸地に降りて目撃するのは、住民の惨状と犯罪の横行である。この書簡でドラムランリッグ伯爵が訴えるのは、地震自体の脅威よりも為政者の無能と道義の紊乱である。

ドラムランリッヒ十一月一九日書簡

テージエ河イグナチウス船上にて、

一七五五年十一月一九日

数日前にパケット船から一層大きな商船へ移動し、非常に大きな客室に身を置いています。

毎日陸へ登っていますが、そこでゆっくり横臥できないのは、さらなる地震で危険に瀕する懸念からではないのです。(破壊を免れた少数の家屋もあり、)住居の破損が酷く、安心して休めないわけでは実際ありません。この国の人々は驚愕から幾分回復し、頻繁な余震の続発にもさほど警戒せず、どの揺れでも第一日のような被害はありません。ようやく良識の回復が始つたと見られます。この被災国の支配者は数日間良識を完全に喪失し、そのため世にも怖ろしい狂瀾怒濤、いかなる国でも目撃したことのない惨状を惹き起すのです。迅速な指令、確乎とした統率、安全の確保が皆無でした。政府は保護する権力も処罰する権限も行使しません。人々の動転に付け入る厚顔で邪悪な精神だけがどの団体をも牛耳り、数日間恣しいままにあらゆる悪事になされたのです。

イギリスから軍人が近いうちに来る予定があれば、軍艦の一艘に乗せて頂き、地中海へ迂回してもよいのです。これだけが私に残された唯一の方策であり、父上のご同意を得られれば幸いです。さもなければ、私の健康を考慮されたすべての友人の助言に逆らつて、パケット船でイギリスに帰るほかないのです。軍艦に乗るほうが、艱苦がすくないように思います。

イギリス、ハムブルグ、そしてイタリアが蒙つた損失は莫大で得難いものですが、ひとりの富裕な商人が早くも巻き返しを開始しました。これまで直面した苦渋な状況のなかでも、事態の真相を知らされる毎に、自己の破滅をますます理解困難と感じる避難民のなかで生きることほど、凄惨な局面はあ

りません。

十一月二十日ウィリアム・クリエス船長はイギリスへのパケット船運航を許可された。乗客の第一陣は貿易商ベンジャミン・ファマーなど十七名で、いずれもリスボンに安住できず、前途も覚束ない人々であった。港に待機したドラムランリッグ伯爵は乗客名簿から除かれ、一縷の望みは大英帝国の軍艦だけとなった。大陸諸国を牽制する海軍がときには地中海へ出動し、それに便乗すれば、スペインかイタリアへ上陸するのも可能なのである。

十二月に入るとリッチ・ドリル船長と軍艦ペンザンス号に護衛され、イギリスの漁船団がカナダから到着する。船団に満載された大量の塩漬タラは野営する幾万もの人々に供される。だが、リスボン経由で地中海へ軍艦が出動する見込みはなお得られなかった。そのため大使カストレスの懇請を受けてドリル船長は、イギリスへ帰るペンザンス号にドラムランリッグ伯爵を同乗させることに同意する。やはり同乗を許可されたアイルランド系在留民とともに、十二月十二日伯爵は護衛船二艘を伴うペンザンス号で一路祖国へ向った。

三、大地震以後のクインズベリー公爵夫妻

スペイン駐在のイギリス大使ベンジャミン・キー又は、外交官としてカストレスの先輩、リスボンにおいては先任者である。一七四六年から一七四九年までポルトガルに駐在したキー又は、寛厚な人柄で在留民に信望が厚く、英国商館の幹部、とくに貿易商クリストファー・ヘイクと交誼を続けた。カストレスはもつとも親密な友人のひとりであり、一九三三年に編纂された『ベンジャミン・キー又私的書簡集』では、カストレス宛の手紙が過半を占めている。この書簡集はイギリス近代史の貴重な史料と考えられるが、キー又宛ての手紙が残念ながら収録されていない。

一七五五年一二月イギリスからクインズベリー公爵の書簡を受け取った。子息ドラムランリッグ伯爵の艱難に苦悩する公爵は、軍艦による帰途イタリあるいは

Drumlanrig, Letter to Duke of Queensbury, dated 19 November 1755. British Library,

Egerton MS 3482, Leeds Papers. Vol. CLIX, ff. 153. pp.1-2.

Paice, *op.cit.*, pp. 144-145.

Paice, *op.cit.*, pp. 155-156.

スペインに迂回する可能性を考え、大陸での支援を大使キーヌに依頼した。現在この書簡は入手できないが、キーヌの同月一九付カストレス宛書簡によって伯爵の帰国をめぐる状況を知ることができる。

キーヌ一七五五年十二月十九日付書簡

アブラハム・カストレス殿

マドリッド、一七五五年十二月十九日

ベンジャミン・キーヌ

さきに今月二日付書簡を頂き、いま十一日付書簡を受け取りました。いつまたいかにして脅威が消えるかと、苦慮されるのも当然でしょう。丹誠にも友人たちの安否を知らせて頂きました。ご家族全員とともに奇蹟的に脱出されたタヴォラ侯爵を祝福し、その他生存者の方々にもお喜び申し上げます。震災の全体状況からすれば、在留民の犠牲者が少数であったことは、奇蹟のように思われますが、不幸にも伴侶を亡くされたヘイク殿へどのように弔意を伝えるべきか判りません。 中略

憂鬱な手紙のひとつとして、クインズベリー公爵から書簡を頂きましたが、その文面を拝読し、いまだ落涙を押え切れません。事情はご存知かと思えます。ご子息の安否が判らぬまま、公爵は生存の希望でみずからを支え、郊外に住処を確保されたのです。この若い貴族に関しては、あなたに下した推断を同じように抱きます。かかる事態にかかる人物の音信が途絶えることを、多くの事例は示しています。彼があなたに宛てた手紙には、ふたつの称号が付され、公爵からお聞きしたその理由は、感銘深いものでした。（長男の急死という）家庭的な不幸があつて、ドラムランリグ伯爵家を弟が相続したのです。カントレイ医学博士と一緒にいま彼が船上にいることを、私はクインズベリー公爵にお伝えします。ご子息が怖るべき惨憺たる状況から脱出できたか否かを、明らかに公爵は知らず、マドリッドへ寄る場合には、必要な支援が得られるよう、私に懇請されるのです。若きドラムランリグ伯爵に知らせてください。マドリッドに寄られる場合には、必要なものをすべてを提供するのみならず、私のもとや宮廷においてあらゆる歓待が用意される、と。遺

憾にも公爵の書簡はビュロツク船長による出航より遅く届きました。

キー又のもとへは罹災に関する照会が相い継ぎ、情報が得られないか、あまりにも無惨な現実であるため、ほとんど回答できないのである。たとえば、銀行家ハルポイ又は地震のため発狂し、船上では鎖に繋がれ、故郷ヨークシエアールでは番人に監視された。

一七五六年一月ドラムランリッグ伯爵はソールズベリーの城館へ帰り、クインズベリー公爵夫妻は随喜して愛し子を迎え入れた。かつて彼と戯れた文学者ゲイをはじめ、プライア、ポウプ、スイフトなども世を去っていたが、六十歳に近い公爵夫妻はなお健在であった。しかし、震災の疲労困憊とイギリスの厳寒は結核に冒された身体にきわめて苛酷であった。帰国して十カ月後でドラムランリッグ伯爵は逝去し、親子再会の幸せは束の間に消えた。

長男の不慮の死に続いて、次男ドラムランリッグ伯爵の夭折に世の同情は集っていた。しかし、ジョージ三世の即位とともに政界に返り咲いた公爵は、スコットランド大法官に就任し、さらに高等裁判所判事の地位をも占めた。一七六二年十二月クインズベリー公爵は近親の紹介でエジンバラ出身の青年と面会し、近衛連隊への就職斡旋を依頼された。のちに大著『ジョンソン伝』を執筆し、奴隷貿易の廃止活動にも関与したジェイムズ・ボズウエルがこの青年である。就職運動は不首尾に終るが、公爵との面会についてボズウエルは『ロンドン日記』に「つぎのとおりに誌す。

十二月二日木曜日。九時に公爵をお待ちした。彼はきわめて鄭重に私を迎えてくれた。大いなる人間愛と柔らかな物腰の人で、率直かつ的確な知性を持ち、身に受けた苛酷な打撃にもかかわらず、非常に快活である。職務を世話することは大変難しいと思うが、試みてみよう」と公爵は私に申された。ほかにだれもいなかったが、喜ぶというよりもむしろ恥かしい思いをした。しかし、最初の面会であまり喋らぬようがよいと考えた。だから長居はしなかった。

Benjamin Keene, *The Private Correspondence*, Cambridge, 1933. pp.442-444.

Paice, *op.cit.*, p. 163.

Paice, *op.cit.*, pp. 156, 163.

James Boswell, *London Journal 1762-1763*, London, 1951. pp.63-64.

同年五月フランスでは大著『エミール』が出版禁止の処分を受けるとともに、著者ジャン・ジャック・ルソーに逮捕状が発せられた。急拠スイスに亡命した彼を故郷ジュネーブも追撃し、ついにヌーシャテル州の寒村モチエへ避難する。一七六三年ヨーロッパ周遊に旅立ったボズウエルは、翌年モチエでルソーと会見し、さらにヴォルテールをも訪ねた。ふたりの思想家がリスボン大地震について叙述したことはよく知られているが、ボズウエルとの会見でこれを話題にしたか否かは不詳である。

一七六四年イギリス海軍の艦長ステア・ドウグラスはカリブ海セント・ Kitts 島で十歳の黒人奴隷を購入し、親戚のクインズベリー公爵夫人に贈呈した。この少年ユリウス・スピーズは利発な素質を持ち、公爵夫人にわが子のように養育される。ロンドンで彼は乗馬とフェンシングの専門学校、アンジェロ学院へ入学し、校長の補佐を勤めるまでになった。個人奴隷がイギリス貴族に育てられ、黒い英国人として名をなした事例には、モンターギユ公爵夫妻に庇護されて多くの作品や作曲を執筆し、奴隷貿易の廃止運動を推進した購入されイグナチウス・サンチョが挙げられる。やがてスピーズは社交界のさまざまな会合に招かれ、ヴァイオリンの演奏や作曲の歌唱でも評価を高めた。彼の芸術的才能と端正な容姿はクインズベリー家に集う上流夫人やそこで使える召使をも惹きつける。しかし、先輩サンチョの忠告にもかかわらず、次第に彼の生活は放漫となり、アンジェロ学院からの解雇された。一七七七年クインズベリー家の召使に対する不祥事が発覚し、インドへ居を移し、そこで生計を見出す命じられる。スピーズが同家から立ち去った二日後、公爵夫人は挿話に鏤められる生涯を閉じた。七十歳を過ぎてもなお典雅で活発なキティであったが、死因はイチゴの食あたりとも胸部の疾患とも伝えられる。

同じ時期にクインズベリー公爵はスコットランドの権能強化と経済発展に熱意を示した。グラスゴーとエジンバラを結ぶ水上運輸の要め、フォース・アンド・クライド運河の建設は、彼を事業の会頭とし、土木工学の父ジョン・スミートンの主導によって一七六八年に開始された。一七七八年公爵は事故による脚部負傷の悪化で逝去し、その爵位は従弟ウィリアム・ダグラスに引き継がれる。十二年

後五六キロに及ぶ運河が完成し、一八〇二年には最初の蒸気船も運航した。

Charles Douglas, 3rd Duke of Queensberry in on line *The Douglas Archive .op. cit.*

Citizen of Edinburgh, *Thoughts on the intended navigable communication between the Friths of Forth and Clyde. In a letter to his Grace the Duke of Queensberry*, Edinburgh, 1768. pp.1-2, 26.